

【対談】

租税法研究指導主査教員インタビュー

— 北井好則教授 —

本学学生の多くが、税理士試験科目免除申請を想定し税法科目の修士論文作成に挑んでいます。仕事や家庭を持つ学生が大部分のため、十分な時間の確保ができない環境の中、2年間という限られた時間をいかに効率的に使い、研究を深め、質の高い修士論文を完成させることができるか。その目的を達成するため、本学では特色的な修士論文指導体制を整えています。さらには、2020年度より、Zoomを利用したオンライン指導に切り替えを行いました。

今回のインタビューは、税法論文指導の主査として多くの学生を指導している北井好則教授を迎え、北井教授ならではの指導の視点を伺いました。論文作成を通して技を確立し、さらに磨いて進化させ、一生の技を身につける—北井班での指導の中核をなす「マインドマップ」とは。

インタビュアー／劉昊准教授（租税法研究指導 構成指導担当）

開催日／2023年8月29日（火） Zoom開催

劉 本日はよろしくお願いいたします。北井先生には2018年度後期から本学の修士論文指導に加わっていただきました。もともと北井先生は税務大学校の教授をされていたかと思いますが、そちらでも論文の指導をされていたのでしょうか？

北井 論文の指導ではなく、ゼミを担当していました。1つのテーマに対して司会班・発表班・研究班・質問班と4つのグループに分かれて議論していくゼミです。

劉 税務大学校での指導と本学での指導では、どのような点に違いがありますか。

北井 税務大学校はいわゆる職場ですから仕事の延長という感じですね。国税職員として必要な知識を広く学んでいきます。専科研修と本科研修を担当していました。専科研修は国税専門官で入ってきた研修生、本科研修は国家公務員試験Ⅲ種採用で高校を出て7年以上勤務し全国から選抜試験で合格してきた研修生が対象です。テーマが与

【対談】 租税法研究指導主査教員インタビュー

えられ、それを研究するわけです。相手からの質問に対して受け答えができるようにする、そういう目的のゼミです。現場に戻って使えるような研修を行っていました。



LEC 会計大学院教授 北井好則

LECのゼミは修士論文の指導ですが、どちらにも共通していえることは、情報だけを与えてもなかなか成果が出ないということです。情報をどう使うか、どうまとめるかという技を習得したほうがその後につながる力になるのではないのでしょうか。自分が税理士試験を受験していた当時、著名な先生から確かにすごい情報をもたらしているんだけどよく理解できないしまとめる方法がわからない、というジレンマがあったんですね。情報を与えるだけではなく、その情報をまとめるにはどうしたらいいのか、その点を助言してあげるほうが研究の成果が出る。その点は工夫しています。情報を与えると同時に、技も伝えて、自分に合う技を確立していくことが、やはり教育的には有効ではないのでしょうか。

劉 北井先生の教員紹介の中にも、情報の提供だけでなく情報の収集方法や情報のまとめ方などの技能(ワザ)を習得してほしい、というメッセージがありますね。技を学生に習得してほしいというのは、税務大学時代から、先生の思いは一貫して変わらない点ですか。

北井 そうですね。自分の信念として、ただ単に情報を与えておしまいではなく、その情報をさらにステップアップするような技を身につけた方が質の高い論文を書けるのではないかと考えています。

劉 それが北井先生の論文指導における一番重要な点であると感じますね。

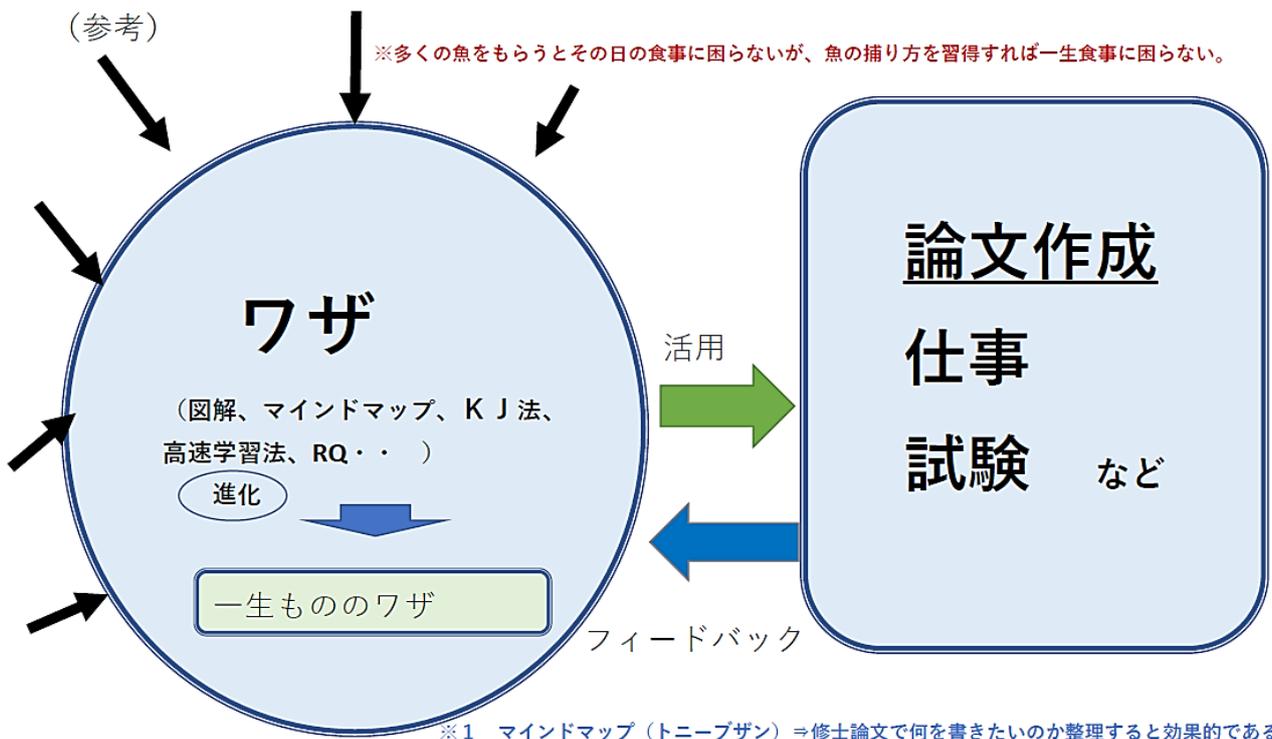
北井 大学院を修了して税理士資格を取得した方への評価は二分していると思います。

「ああ大学院出たの、ああそう」という方と、「へー！大学院を出たんですか、やはり違いますね」と、その「違いますね」という後者を目指したいんですね。とりあえず論文は仕上げたけれど、数年経ったら何も残っていないではもったいないです。論文を書くことが目標ではありますが、論文を書くとともに技を習得するということです。そうすると次の論文もまた書けるんです。書いておしまいだと結果が無駄になってしまう。そうではなくて論文作成を通して技を確立し、さらに磨いて進化させ、一生の技を身につけるということです。それを職場に持ち帰ってほしいです。そうなれば周りからの評価も全く違ってくると思います。

劉 税理士の業界では、大学院で科目免除を受けた人より、税理士試験で全科目合格して税理士になった人のほうがすごい、と思われる傾向もあるようで……。最近、本

学の修了生との食事会があり、大学院に進学して良かったと言われました。税理士試験の受験だけでは身につかなかったようなテクニックや考え方、条文を深く読む習慣などを得る貴重な機会となって、そういう

面が非常に良かった、世間ではどう思われているかわからないけれど、自分は LEC 会計大学院で学んで本当に良かった、という言葉が印象的でした。



出所: 北井作成

北井 私は大学院の他、LEC の税理士試験受験対策講座（一般試験）も担当していますが、税理士講座のほうも大変で、特に所得税法や法人税法は範囲が非常に広いんです。それを深掘したら試験に合格しない。広く浅く基本的なところを確実に網羅するのが勉強のコツなんです。条文と特に通達を暗記しないとイケない。大学院での学びのように深掘りしてしまうと、当たりはずれがありますのでなかなか合格は難しいです。しかも年に 1 回しか受験できませんし。暗記の他に計算もあります。何が出てもすぐ

に解けるように何回も何回も計算の練習をしなければいけません。ボリュームもありますしスピードも必要です。しかし大学院とは違い判例を読むことはほぼないんです。とにかく広く浅く。お客さんから何か聞かれた時に知っていることは答えられると思いますが、「どうしてそうなのか？」という趣旨はたぶん分からない。なので新たな問題が出てきたときに、税理士試験（一般試験）の経験しかないとなかなか答えを見つけれないと思いますね。複雑な問題や新しい問題が出てきた時には、この会計大学

【対談】租税法研究指導主査教員インタビュー

院で学んだことは決して無駄にならないと思います。

劉 大学院で論文を作成した方が圧倒的に思考力は身につくということですね。税法論文と会計論文の両方を大学院で書いたとしても MAX3 科目の免除ですので、残り 2 科目は自分でとらなければいけません。そう考えると大学院修了者のほうが受験も経験するし、論文作成で考えを進化させることができると考えると、論文を書いた学生さんのほうが、より実務でも得る力が大きいのかなと思いました。



LEC 会計大学院准教授 劉昊

北井 とはいえ、真剣に取り組んでの話です。大学院は的を絞って深掘り学習をするわけですが、深掘り学習は範囲が狭いのかというと、深掘りするには全体を俯瞰しないといけません。その上で深掘りすることが大切です。

劉 しっかりとした論文を作成してこそその話ですね。

北井 ただ文字数を稼いで何となく形式を整えてなんとなく免除を受けました、というのでは、力はつかないのではないのでしょうか。

劉 論文を作成する過程で習得した技やスキルは、日常生活や日常業務にどう生かすことができると思われませんか。

北井 やはりマインドマップでしょうか。自分で情報を入力し、情報を整理することができます。論文作成以外でも、一つの仕事をこなすにあたって計画を作るときにマインドマップを利用するとか、本を読むときにマインドマップを作るとか、範囲は広がります。学生にマインドマップを勧めると、私が考えもつかないようなものすごいマインドマップを作ってくる方もいて、こちらのほうが教えられることが多いです。

劉 私自身は修士課程から博士課程まで出て論文もいくつか書いていて、早稲田大学のライティングセンターで指導を受け、指導員になった人間ですが、そこでいろいろ学びかつ自分で論文を書いている時、論文を書いている時の語句の使い方や思考のプロセスというのは、結構日常生活に反映されるようなことがあります。例えばテレビをみても「全然言葉遣いが違うな」、本を読んでも「言葉がずれているな」、というように、ある意味職業病のようなところがあって、それを話すと妻からけむたがられるんですが（笑）

北井 推敲ですよ。書いておしまいではなく、何回も何回も読み返す。修正する。するとどんどん文章が洗練されていきます。マインドマップでイメージを作って論文を書いていきますが、書く段階において、またいろいろな発想が出てきたりする場合もあります。マインドマップでイメージを作り、問いを見つけるといことです。散歩している時に問いの答えが見つかるというようなこともあるのではないのでしょうか。

劉 北井先生の班では皆、マインドマップを作っていますが、他の先生の班でも、北井先生の班をまねて取り入れる動きもありますね。マインドマップというのは北井先生の指導の中では一つの核というか中心的な指導方法になっているということですよ。

北井 いろいろな方法がありますが、一番使い勝手がいいような感じがしますね。

劉 いつ頃マインドマップを指導に取り入れようと思われたのですか？

北井 税務大学の頃に、これはいいなと。税務大学の教育に取り入れたところ、画期的な成果に結びつきました。もともとは、自分が受験していた時に、管理会計の先生から KJ 法（川喜田二郎先生の発想法）を勧められたんですね。KJ 法っていいなと思って、塾などに行き、身につけたのですが、マインドマップはそれより手軽です。非常に複雑な問題の場合は KJ 法がいいかもしれませんが、マインドマップはもっと手軽で、整理しやすいです。自分の頭の整理ができます。これが文章だけで、学生とキャッチボールしているとお互いにチグハグと

いかすれ違いが生じます。お互いイメージするものが違ったりするわけです。そうすると学生は先に進めず、論文作成に支障が出ます。しかし図やマインドマップを使い、見える化を図るとお互い言っていることを共有することができるのでどんどん議論も進みます。論文作成も上手くいきます。

劉 以前一緒に指導していた別の先生の班では、「図をつくりなさい」と学生に言っていました。正確なしっかりした図をきれいに作れるということは自分が理解できているということだ、と。通じるころがあると思います。

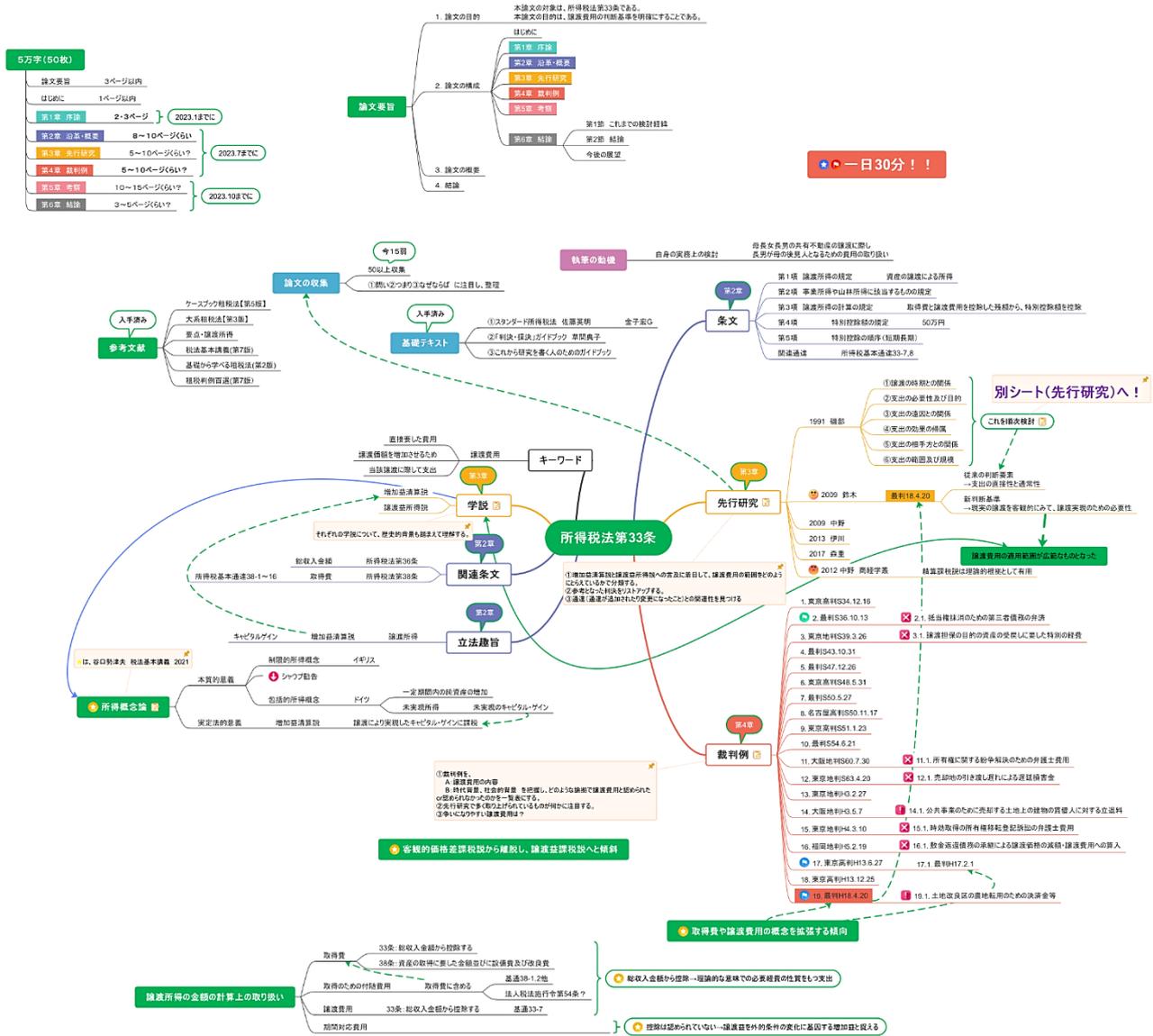
北井 私もマインドマップの前に図を導入していたんです。現在も、マインドマップ、図解、Kj 法をとり入れています。所得税法の勉強も全て図ですね。大きなボックスがあってそれを収入とすると、必要経費がその中であって、等、全部図で説明できるんです。

劉 図にしてもマインドマップにしても、論文を見える化する可視化する、一つの重要な作業ですね。

北井 図で理解してそれを文章化する必要があります。

劉 文章から図、図から文章というふうに理解が進むということがありますね。先ほど、問いを見つけることが大事と、ありましたが、それもマインドマップ、見える化によって促せるということはあるですか。

北井 どこがわからないかがわかる、ということ。それが見つかるということでしょうか。

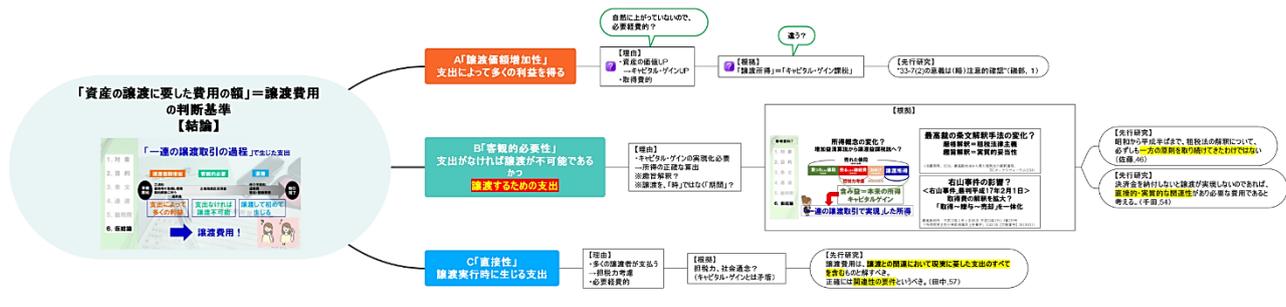


北井班所属学生<松上睦子氏>作成 マインドマップ1

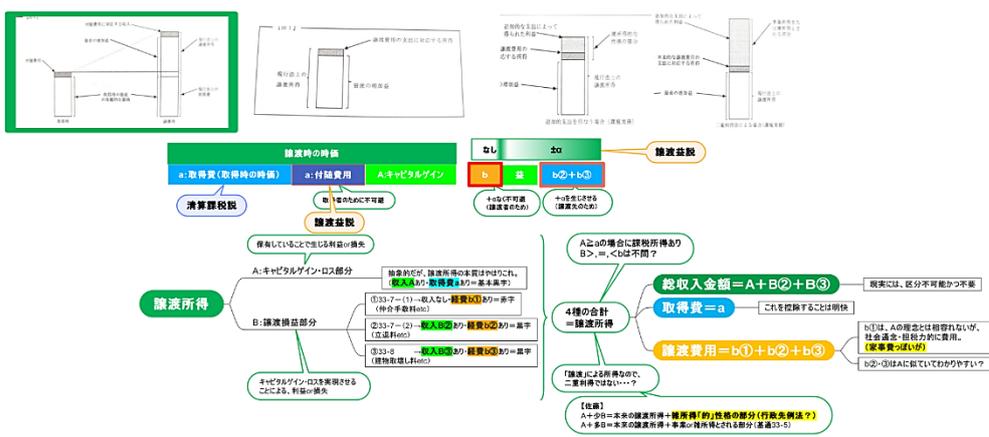
劉 マインドマップ、見える化というキーワードは、北井先生の指導の根幹をなしているのだと思います。私も北井先生と指導で組ませていただいている中で非常に感じていたところです。その他、指導上の工夫点や重要点があればお聞かせいただけませんか。

北井 「わかる」ということが重要です。例えば、書き方がわかる、手順がわかる、内容がわかるとか、問題がわかる・・・、わかるということは非常に大事です。でない

と進まないですね。自主性を尊重して、では書いてくださいといっても書けないですね。後押ししてあげる必要があります。キャッチボールの中で問いを見つけているということです。なぜ？ということですね。問いが見つかるとうえをみつけようとするんです。そうするとある日、わからなかったことがわかるようになります。問いがなければ答えに巡り会えません。チャンスを失ってしまう。



金子租税法p.271(二重利得法、立法論 & 解釈論でも成り立つ) 資産の譲渡による所得の分類については、一般論としては、
 A:所有者の意思によらない外部的条件の変化に起因する資産価値の増加は、譲渡所得。
 B:所有者の人的努力と活動に起因する資産価値の増加は、事業所得や雑所得。



北井班所属学生<松上睦子氏>作成 マインドマップ2

劉 わかるということの後押ししてあげる、問いをみつめてあげる、ということに関してもやはり見える化に通じていくということですね。
北井 そうですね。見える化が大事です。ですから仕事でも何事においても計画を作って計画を見える化すると早く目的にたどり

つきます。
劉 北井先生の指導の中では、この「見える化」を一番大事にされているな、ということが非常によくわかりました。
 さてここまでは、論文の指導方法に関してお話いただきましたが、少し視点を変えて、本学の修士論文指導体制についてお聞

【対談】租税法研究指導主査教員インタビュー

きします。LEC独自の体制としてチーム制での指導がありますが、チームワークなどはどうお感じですか？最初LECに入られた時はおそらく驚かれたのではないかと思います。1人の学生に2~3人も教員がつくのか、と。

北井 主査・構成・ライティング、それぞれ役割がありますが、とはいっても一体なので、2人の先生に指導してもらおうにしても、私がある程度踏み込んで発言しないと学生は理解できないのかなと思うんですね。学生とのキャッチボールが大事だと思います。それぞれの教員が、この学生は何を目的としてどういう論文を書こうとしているのかを理解する。それがわかると3人で共有していくことができる。私が踏みこんで学生と話をし、2人の先生にそれを理解してもらうことが大事だと思います、チームワークです。

劉 本学のようにチーム体制を敷くメリットはどのへんにあると思いますか？

北井 他大学院では、基本的に論文作成は学生任せ、自由にしなさい、というところもあるようです。それはそれでいい面もあると思います。自分で全てをやらなければいけない、それは非常に大変ですが力は身につくと思います。ですが2年間という短い期間で質の高い論文を書くためには、チーム制というのは非常に良い方法だと思います。大事なのは最初のスタートダッシュです。早いタイミングでスタートダッシュできるということです。導入の段階で後押しをしてあげないとなかなか進まないです。書き方がわかった時にはもう2年経ってしまっていたというようなことだと良い論文

は書けません。そういう点は複数体制の良い点だと思います。

劉 ありがとうございます。本学のもう一つの特徴としてマイルストーン管理がありますが、マイルストーンとは極端な話、学生をしっかり管理してやっていこうという面もあると思います。私が大学院生の時代を思い返してみると、指導教授から指導されたことはほとんどないです。ある意味それが学問の世界かもしれないが……。ゼミは毎週実施されますが、毎週毎週アドバイスをもらえるわけではないですし、年に何回か添削されて、これでいいよ、みたいなところが大きかったです。かたやLECのマイルストーンを考えると、毎週木曜日の朝に草稿提出しなさい、毎週必ず執筆を進めてください、ということ結構厳しくやっていますね。この点は一般の大学院との大きな違いです。本学の大きな特徴ではあると思うのですが、一方で学生からすると管理され過ぎるといえるか、ゼミに出てさえいけばおのずと完成する、指導教員が全てしてくれるから自分はしなくていいと、主体性が失われてしまう部分が少なからずあるような気がしています。その点はいかがでしょう。

北井 マイルストーンはペースメーカーとしては非常に良いと思います。ただそれを真に受けて、例えば、序論は1年間かけて書けばいいんだ、と思ってしまうと最後慌ててしまうことになります。マイルストーンを一つの日安として、書けるのであればどんどん先に進んでほしいです。学生によってレベルが違いますから一概にはいえませんが、日安は日安であって、そこには向

かってはいくわけですが、ペースが速い人、スタートダッシュがうまくいった人はそこで立ち止まることなくどんどん先に進めばよいと思います。

劉 学生自身の主体性といいますか、自分からすすんで取り組むという姿勢が必要だと思のですが、主体性ややる気を引き出すためにはどうすればよいと思われませんか。

北井 やはり「面白くなる」ということが大切です。わからないとどうしても嫌になりますよね。図を作ったりマインドマップを作ったり試行錯誤するうちになんとなく見えてくるんじゃないでしょうか。次のステップに行くといいますか、こうやったらうまくいくなということがわかるとどんどんおもしろくなります。学生の目をみていると、この人はもう一歩先に進み始めたな、ガチガチに管理しなくても自分自身で進んでいけるな、ということがわかります。コツがわかってきたといいますか、テーマに対してよく理解できてきた、そうすると合格基準にいくわけですね。

劉 ガチガチに管理しなくもいい学生というのは最初から取り組み方が違いますね。それは本当に面白いです。興味関心をもって取り組んでいるというところがありますね。

北井 その域にいくまでのスタートダッシュは後押ししてあげる必要はありますが、もう大丈夫だとなったらどんどん一人でも進んでいけるんですね。

劉 おそらく理想形としてはそのような学生をたくさん作っていくということですね。

北井 研究が楽しくなっていくのでうまくいくんですね。もっとこのところを研究してみようと興味も沸いてきます。ただ方向

性が違ってきてしまった場合には、調整してあげないといけません。

劉 指導教員によっては、指導教員が考える方向性じゃないと指導しないよ、という方がおられるようですが、そうではなく学生が自分で方向性を決めて、それが間違っていないか教員に尋ねて指導してもらおうというのが理想のかたちでしょうか。

北井 今まで担当した学生の論文で同じテーマの人もいましたが、同じテーマでもワンパターンはないですね。自分自身も変わってきているのかもしれませんが、どんどん新しいものを取り入れたりしているので。学生と一緒に考えるという感じです。自分がこうだと思ったことでも、学生が違う切り口を見つけてくれたらそれを一緒に考えるという感じでしょうか。

劉 そういう面は学問をやっている楽しみですね。管理されて指導されてこうやりなさい、というよりも自分でみつける楽しさというのがありますね。

北井 私が気づいていないようなことを見つけてくる学生もいます。そうすると、じゃあ一緒に考えてみようか、となりますね。

劉 修士論文指導に関しては、ここ最近、対面指導からオンライン指導に変わったという大きな転換期がありました。全国各地から様々な学生が入学してくるのはメリットではありますが、一方で対面指導の時のように、横のつながりですね、どうしても学生同士のつながりがうすくなってしまふ。対面の時は、教員を誘って飲みに行くなど、縦のつながりもあったのですが、それも今は難しいですね。オンライン指導に対して北井先生はどのように感じていらっしゃる

いますか？オンライン指導に切り替わって3年ほど経ちますが・・・。

北井 対面指導はいわゆる家庭教師のような感じでした。同じ班でも、一人一人指導教員の前に順番に学生が移動して個別指導をしていたので、同じ班の学生でも、指導内容は聞き耳をたてないとよく聞こえない状況でした。オンライン指導はまさにそのデメリットをメリットに変えた、と感じています。同じゼミの学生が全員同じZoomに入っているの、論文の内容やマインドマップも画面共有されます。他の学生が指導を受けている様子を見聞きできます。その中で、自分の論文に使えるヒントを皆が見つけようとしているんです。他のテーマの仲間はこういう論証の仕方をしている、こういう図解をしている、これは私の論文にも使えるなど、真剣に見てくれています。これは非常に大きなメリットです。お互い刺激を与え合う、教え合うということです。むしろオンライン指導のほうが理想的だと思います。

劉 オンライン化したことで、いろいろなレベルの学生が集まってくる。お互いに考えていることを共有することによって、それぞれが刺激を受けるということですね。進捗が遅れている学生が、順調に進んでいる学生の指導を見ることでひっぱってもらえる、ペースメーカーを作れるという点も大いにメリットですね。逆に出来が良い方でも、なかなか進まない学生の様子を見て、基礎に立ちもどって何かを考えるとということもあるようです。これも見える化・可視化ですね。他の方の状況が見えることによ

って自分の気づきが得られるということですね。

北井 画面共有で自分以外の論文を見ることができる効果は非常に大きいです。

劉 北井先生は2018年から本学で約50名の学生の修士論文を指導いただいています、特に思い出深い学生やエピソードはありますか？

北井 2023年3月に修了した学生の中で、とにかくばぬけて優秀な方がいました。特に細かな指導をしなくても、自分の力でどんどん前に進めていける方です。あの代のメンバーは非常にチームワークがよく、その優秀な学生の論証の仕方を仲間同士共有したんですね。もちろん、同じテーマの人はいませんでした。それが、6名中5名、第1期の締切に修士論文を提出するという驚異的な結果に繋がりました。あれほどまとまったチームはなかったですね。

劉 その方は序論を1年次後期の初回で合格し、その後もペースが衰えることなく、最終的には半期以上残して完成した方です。その方がペースメーカーになり、チーム全体がいい感じでひっぱられていくという効果がありました。6人中5人が第1期で口頭試問を受けたというのは驚きですね。学年全体でも第1期での提出者は少ない状況の中、その期は北井班だけで5名という。非常にチームワークを感じましたね。

北井 非常にまとまっていました。まとまった時のお互いを刺激しあうパワーはすごいですよ。自分の能力以上に力ができます。修士論文は、やはり第1期提出を目指さないとまったくないと思います。最終第3期の

提出では、そのあと一人で進めなければならなくなります。

劉 3 回提出のチャンスがあるといえ、できれば第 1 期に提出し、残りの期間で修正するのがいいかもしれないですね。

北井 早い期で提出すると、ライティングの先生にも目を通してもらえるので、その点もメリットです。

先ほど、6 名中 5 名が第 1 期で提出した、と話しましたが、提出できなかった 1 名も非常に優秀な方でした。最初は皆より早いペースで進んでいたのですが、家庭と仕事の事情で進捗が難しくなり、ほとんど作成を諦めたような状況に陥ってしまったんです。一度遅れてしまうとなかなかエンジンもかかりにくいのですが、授業の最後の頃になって「やはり挑戦してみます」と言ってくれた時はとても嬉しかったですね。その学生が立ち直ったのも、当時の仲間の頑張りを知っているからということが大きかったのではないのでしょうか。学生同士、情報交換は絶えずしていたようです。

劉 ここまで北井先生にいろいろお話を伺ってまいりましたが、最後に、これから修士論文に取り組もうとする方へアドバイスをいただけたらと思います。

北井 テーマ選びが一番大事だと思いますね。恰好良すぎるテーマを選ばない、ということでしょうか。というのは、中にはものすごく難しいテーマを選ぶ人がいます。なぜそうなのかというと、例えば職場や周りの人に「どんなテーマの論文書いているんですか」と聞かれた時に「それはすごいね！」と感心されたいわけです。ですが、テーマがすごいのではなく、中身がすごいとなっ

てほしいですね。2 年間で書き上げる、ということを考えて、テーマを選びますが、まず争い（訴訟）が多いテーマですね。それと条文を読んでも答えが見つからないようなテーマ。解釈が分かれる、そういうものには先行研究も多いし裁判例も多いです。裁判でも最高裁の判断が分かれるものとか。租税法は文理解釈が原則ですが、文理解釈しても意味がわからないものがたくさんあります。そういうものが論文テーマとしてはふさわしいです。「解釈」なので、いかようにも書けるんですよ。そして、読む時には比較することが大事です。地裁・高裁・最高裁が同じ争点についてどういっているのか、必ずしも同じことをいっているわけではないんです。課税要件があるわけですが、解釈と当てはめによって答えが違ってきます。そのところを分析する。面白いテーマを見つけるということです。論文を書くにあたっては、このテーマでは自分が日本で一番詳しい、というくらい精通する必要があります。自分の意見に近い良質な論文を見つけて、徹底的に繰り返し繰り返し読んで身につけるということです。どうしてもわからなければ、簡単な薄いテキストで概要や全体のイメージを把握します。そのイメージを作ってから自分の言葉で表現することです。

そして、最後まで絶対にあきらめないということも重要です。そのためには計画が必要です。自分自身で計画を作って計画の見える化をすることです。そしてぜひ仲間を作ってください。チームで進捗状況や情報の共有をすることです。仲間と一緒に頑張れます。

劉 本日は貴重なお話をありがとうございました。
した。

北井 こちらこそ、ありがとうございました。